

文部省檢定

教科書文庫
4
815
41-1921
2000081513

明治書院編輯部編

訂新編日本文典上

東京株式會社明治書院

41880

教科書文庫

4
815
41-1921
20000
81513

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

資料室

日一月二十年十正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

4
815
41-1921
2000081513

明治書院編輯部編

訂新編日本文典上

東京
株式會社明治書院

広島大学図書

2000081513



42
815
大10

資料室

日一月二十年十正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

教科書文庫

4

815

41-1921

2000081513

明治書院編輯部編

訂新編日本文典上

東京 株式會社 明治書院

広島大学図書

2000081513



4A
815
210

大正十一年十二月一日
文部省教育司
東京市豊島区

東京市豊島区
言文典
言文典



例言

一、本書は中學校、及びこれと同程度の諸學校等に於ける日本文法の教科用書として編纂せるものなり。故に、専ら平易適切を主とし、徒に理論に流れしめず、生徒をして容易に日本文法の一般的智識を會得せしめ、讀書に作文に、直に之を實際に應用し易からしめむ事に勉めたり。

一、本書に用ひたる文法上の術語、分類等は、勉めて從來慣用せらるゝ所に従ひて、敢へて私見を加へず。蓋し、教科書に著者の創見を説くが如きは、生徒をして徒に據る所に迷はしむるのみならず、教授上にも害ありて益なしと信ずればなり。

一、本書中、特に意を用ひて編纂したる所、左の如し。

例言

一

- 一 品詞の區別を説く前に、單語の構造を述べて一語一語の成立を知らしめ、而して後、その品詞の分類に及びたること。
- 二 動詞の活用形を諸記せしむるに、最も簡單にして、而も極めて容易なる方法を講じたること。
- 三 文語の活用と口語の活用とを同時に教ふるは、却て生徒の記憶を混亂せしむる恐あれば、文語の活用を大體授けたる後に於て口語を説明し、以てその異同を知らしめたること。
- 四 助動詞、助詞の意義、用法等は讀本教授の際にも説明すべけれど、なほ文法を授くるに當りて詳説する方、却て生徒の智識を明確ならしむべしと信じたれば、勉めてこれが説明に意を用ひたること。
- 五 今文にては殆ど用ひられざる中古の語法も、讀本中に散見するものは一應教授するの必要あるべしと信じ、便宜之を附説したること。
- 六 特に、惑ひ易き助動詞、助詞、及び誤り易き語法の二章を設け、その誤謬の因つて來る所を説明し、生徒をして作文の際などにその誤を再びせざらしむるやう勉めたること。
- 七 所々に挿入せる練習問題は成るべく生徒の學力に相應せる適切の例を採り、以てその學べる所の文法上の諸法則を反覆練習するに便ならしめたること。

一、本書中には、一切假名遣法を説かず。されば、若し假名遣法の一般をも併せて教授せられむには、本編輯部にて別に編する所の「改訂假名遣教科書」を併用せられむことを望む。

大正十年十月

明治書院編輯部識

五 十 音 圖

	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行	
ア段	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	片假名
イ段	井	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	
ウ段	ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	
エ段	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	
オ段	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	
あ段	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	平假名
い段	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	
う段	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	
え段	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	
お段	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	

修 新 編 日 本 文 典 卷 上 目 次

單 語 篇 (上)

第一章	單 語	一
第二章	名 詞	七
第三章	代 名 詞	一三
第四章	動 詞	一五
第五章	形 容 詞	一九
第六章	體 言 用 言	二四
第七章	助 動 詞	二九
第八章	助 詞	三六
第九章	副 詞	四一
第十章	接 續 詞	五一

第十一章	感動詞	五四
第十二章	動詞の語形	五八
第十三章	動詞の活用	六三
第十四章	形容詞の活用、及び、その語形	八〇
第十五章	助動詞の活用、及び、その語形	八四
第十六章	文語 口語	八九
第十七章	口語の動詞の活用	九一
第十八章	口語の形容詞の活用	九五
第十九章	口語の助動詞の活用	九六
第二十章	口語の助詞	一〇〇
第二十一章	音 便	一〇四
第二十二章	係 結	一〇〇

(終)

修訂新編日本文典卷上

單語篇(上)

第一章 單語

○「森」「鳥」「茂る」「黒し」などの如く、或意味を表す一つの語を單語といふ。

- 一 櫻 は 春 咲く 花 なり
- 二 清 さ 水 岩 の 間 を 流る

文章は單に文といふ。

右の例の一は六の單語より成り、二は七の單語よりなる。而して、これ等の例の如く、單語を連ねてまとまりたる思想を表したるものを文章といふ。

○一の單語も、よくくその構造を吟味する時は、數單語の合して成れるもの少からず。

石橋 渡船 郵便函 乳母車 生命保險會社
心細し 見苦し 物語る 近寄る 落し入る

右の如く、數單語の合して一單語となれるものを熟語といふ。

○熟語の中には、同一の語の重りて成れるものあり。

山山 人人 時時 要所要所 五分五分

追ひ追ひ 増す増す 寄り寄り

右の如く、同一語の重疊せる熟語を、特に疊語といふ。

○又、熟語の中には、一單語の頭、又は尾に、獨立しては表れぬ助語の添はりて成れるものあり。

お手 手足 み國 た靡く さ迷ふ か弱し
け高し ひが目 もろ人 さし迫る ほの見ゆ
いち早し なまやさし
暑さ 深み われら 友たち 春めく 黄ばむ
高ぶる 頭だつ 烟たし 露けし 路すがら
見がてら 思ふままに

右の如く、一單語の頭、又は、尾に接して熟語を成せども、獨

接頭語・接尾語
は冠辭・尾辭と
もいふ。

立しては表れぬ助語を接頭語・接尾語といふ。

◎左の文章中より熟語と疊語とを摘出せよ。

- 一 高く聳えたる木々空を蔽ひて、晝も薄暗し。
- 二 朝日に匂ふ山櫻ほど美しきものはなし。
- 三 丸木橋を渡りて、雑木林の中に入れば、藪鶯の聲きこゆ。
- 四 去る者は年々に遠ざかり、來る者は日々に近づく。
- 五 國々より産する珍しき品々を集む。

◎左の文章中より接頭語と接尾語とを摘出せよ。

- 一 さ夜更けて、ほの暗き御燈の影ものさびし。
- 二 厚みはあれども、重さは却て輕げなり。
- 三 昔の侍たちは、我が君のみ馬のおん前にて討死するを譽とせり。

- 四 吾らの友だちに、井上といふ姓の人三人ほどあり。
- 五 人々もろ手を舉げて萬歳を叫び、うち喜ぶ事限りなし。

○數單語の合して熟語となる時は、その語の音に變化を生ずること少からず。

- 一 いしばし(石橋) ときどき(時時)
- 二 たかやぶ(竹藪) こわいろ(聲色)
- 三 もたく(持ち上ぐ) ことづて(言傳へ)
- 四 たらひ(手洗ひ) あふみ(淡海)

四 ふばこ(文箱)

あぶみ(足踏み)

まがたま(曲り玉)

たびと(旅人)

五 やうか(八日)

むいか(六日)

よつほど(餘ほど)

右の例の一の如きを連濁といひ、二の如きを轉音といひ、三の如きを約音といひ、四の如きを略音といひ、五の如きを加音といふ。

◎左の熟語をもとの單語に分ちて見よ。

はるさめ(春雨)

かはひ(河合)

とやま(富山)

しらが(白髪)

ほばしら(帆柱)

はなぞの花園

あまぐも(雨雲)

なるみ(鳴海)

さかだる(酒樽)

かざあな(風穴)

にしごり(錦織)

てうづ(手水)

ふづく(文机)

ささぐ(捧)

しまばら(島原)

あじろ(網代)

うなばら(海原)

ほかげ(火影)

けだかし(氣高)

○單語をその意味により、或はその形によりて、左の九の種類に分つ。之を九の品詞といふ。

名詞 代名詞

動詞

形容詞

助動詞

助詞

副詞

接續詞

感動詞

第二章 名詞

○一 「子供が花を折る」の「子供」「花」などは、物の名を表す語なり。

二 「勉強は幸福を生む」の「勉強」「幸福」などは、事の名を表す語なり。

右の如く、事物の名稱として用ひらるゝ語を名詞といふ。○名詞の中には、事物の數量、又は、順序などを表す名稱として用ひらるゝものあり。

百 千 三年 十人 五十頭 八百里 壹萬噸
第壹號 五番目 幾百圓 數十輛

右の如く、數量、順序などを表す名詞を、別に數詞ともいふ。

◎左の文章中より名詞を抽出せよ。

一 兵役と納税とは國民の義務なり。

- 二 親の恩は山よりも高く、海よりも深し。
- 三 東京、京都、大阪を日本の三府といふ。
- 四 佐々木高綱は頼朝公より生倅といふ名馬を賜はりぬ。
- 五 一番目の弟は十歳にして、二番目の弟は五歳なり。
- 六 五百圓を投じて、一疋の子犬を購ひし紳士あり。
- 七 氣候温暖にして、頗る衛生に適したる土地なり。
- 八 日暮れて帆影漸く消え、漁火次第に見え初めぬ。

○名詞に崇敬の意を添ふるために、「お」「み」「ご」「おん」「おほ」「おみ」「おほみ」等の接頭語を冠らしむることあり。

お文 み心 ご殿 おん車 おほ君 おみ輿
おほみ恵み

おみ・おほみは
二の接頭語の重
れるものなり。

○又、名詞に複数の意を添ふるために、「ら」「たち」「がた」「ども」「など」「ばら」等の接尾語を附することあり。

生徒ら 親たち 宮がた 子ども 歌など
法師ばら

右の如く名詞の上、又は、下に種々の接頭語・接尾語を添ふとも、なほ、一名詞と見るべきものなり。

○名詞は熟語より成るもの、殊に多し。

山山 人人 山鳥 針鼠 日暮れ 夕映え
落ち穂 嬉し涙

○漢語の熟字も、また、熟語の名詞と見なすべきものなり。

修養 立志 勤勉 無慈悲 不思議 好風景

不俱戴天 傍若無人

○又、二の名詞が「の」「が」「つ」等の語にて連ねられたるものも、一の熟語の名詞と見なすべきものなり。

源の義經 鬼界が島 天つ少女

◎左の文章中の名詞を摘出せよ。

- 一 叔父は娘ども數多あれど、男の子は一人もなし。
- 二 富士の山の頂上にての最高峯を劍が峰といふ。
- 三 霞が關のお屋敷を訪ねて、夕暮に家に歸れり。
- 四 後悔前に立たず、堪忍は無事長久の基と知れ。
- 五 吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりけり。
- 六 年頭の賀客も絶えて、萬歳の鼓も止み、追羽子の音も聞えずなりぬ。

○名詞の中、「山」「川」「國民」「神社」等の如く、同類の事物に共通して用ひらるゝものを普通名詞といひ、又、「日本」「東京」「乃木希典」「明治神宮」等の如く、同類の中、特に一事物に限りて用ひらるゝものを固有名詞といふことあり。

第三章 代名詞

○一 「我は汝と誰を訪はむか」の「我」「汝」「誰」などは、人の名に代へていふ語なり。
二 「それをここよりかなたへ運べ」の「それ」「ここ」「かなた」等は、事物・場所・方角などの名に代へていふ語なり。
右の如く、名詞の代りに用ひらるゝ語を代名詞といふ。

○代名詞の中には、名詞より轉じたるもの少からず。

君 僕 私 貴殿 足下 大人 先生 小子
拙者 迂生

○代名詞も、また、名詞の如く複數の意を添ふるために、「ら」「ども」「たち」「がた」「など」等の接尾語を附することあり。

我ら 私ども 汝たち 君がた わらはなど

右の如く、代名詞の下に種々の接尾語を添ふとも、なほ、一の代名詞と見るべきものなり。

○代名詞は、又、これを重ねて複數の意を表すことあり。

吾吾 誰誰 此處彼處 彼方此方

右の如きも、また、一の熟語の代名詞と見るべきものなり。

これ・それ・が
れ・たれ等の代
名詞は、略して
こ・そ・か・た
このみいはる。
この人
その身
かの件
たが家

◎左の文章中の代名詞を摘出せよ。

- 一 吾等は君の來るを彼處にて待たむ。
- 二 誰かこゝに來て、私どもの荷物をかなたに運びくれよ。
- 三 そこにある硯と、かしこにある紙とを、こゝに持ちて來よ。
- 四 かしこに居る人は、どこの何といふ人か。
- 五 汝は、彼の人といつゝの頃より交れるか。
- 六 かなたに見ゆるは、いづれの山脈なるか。こなたに流るゝは何といふ河ならむ。
- 七 これはこゝに、それはそこに、かれはかしこに、そのまゝおけ。
- 八 その説を聞くもの、いづれも彼の博學を感歎せぬはなかりき。

○代名詞の中、「我」「汝」「誰」等の如く、人の名に代へて用ひら

るゝものを人代名詞といひ、又「それ」「ここ」「かなた」「いづれ」等の如く、事物・場所・方角などの名に代へて用ひらるゝものを指示代名詞といふことあり。

第四章 動詞

○一 「旅人が馬に乗りて行く」の「乗り」「行く」などは、事物の動作を表す語なり。

二 「烟のある所には火あり」の「ある」「あり」などは、事物の存在を表す語なり。

右の如く、事物の動作・存在を表すに用ひらるゝ語を動詞といふ。

○動詞は下の語につゞくるために、その語の末がさまざまに變化するものなり。

書かむ……書きぬ……書く……書けば

落ちむ……落つ……落つる時……落つれば

受けむ……受く……受くる時……受くれば

有らむ……有り……有る時……有れば

右の如く、その語の末の變化するを動詞の活用といひ、さて、その變化する部分を語尾といひ、その變化せざる部分を語根といふ。

◎左の文章中の動詞を摘出せよ。

語根は又語幹ともいふ。

一 風吹けば花散る。

二 山を越え、谷を渡りて、漸くに人家ある所に出づ。

三 月落ち、鳥啼きて、霜天に滿つ。

四 雨止み、空晴れて、日輝き、蝶舞ひ、鳥歌ふ。

五 彼方の空に聳ゆるは、芙蓉峰なり。此方の沖に霞みて見ゆるは、大島なり。

○動詞の中には、他の品詞の下に、種々の接尾語の添はりて成れるものあり。

涙くむ 黄ばむ 頭だつ 春めく 花やく

音なふ 高ぶる 塞がる 薄らぐ

○又、數單語の熟合して、一の動詞と成れるものあり。

物語る 身構ふ 飛び立つ 打ち破る 掻き分く
あざ笑ふ 取り亂す

○動詞は、又そのまゝ、いひ据ゑられて、名詞となることあり。

こほり(氷) かすみ(霞) ひかり(光) めぐみ(恵)
をしへ(教) あそび(遊)

◎左の文章中の動詞を摘出せよ。

- 一 氷をうち砕きて、池中の魚を捕ふるを見る。
- 二 かなたに目立ちて見ゆる高樓は、誰の住家か。
- 三 庭の景色も秋めきて、萩の下葉やうく色ばみぬ。
- 四 田舎なれど、教育行き届きて、皆物知りの人のみなり。
- 五 都を離れたる僻地に住む人ほど、體力勝れたり。

- 六 古びたる帽子を被り、穢れたる靴をはく。
- 七 戦に勝ち誇りたる今川義元の軍は、その備へを怠りて、遂に桶狭間に敗れぬ。

第五章 形容詞

- 一 「瀬の早き川は水清し」の「早き」「清し」などは事物の状態を形容していふ語なり。
- 二 「虎は猛く羊はやさし」の「猛く」「やさし」などは、事物の性情を形容していふ語なり。

右の如く、事物の有様を形容するに用ひらるゝ語を形容詞といふ。

○形容詞も、また、動詞の如く下の語につゞくるために、その詞の末が變化するものなり。

高くば	……	高し	……	高き人	……	高けれど
善くば	……	善し	……	善き人	……	善けれど
貧しくば	……	貧し	……	貧しき人	……	貧しけれど
悪しくば	……	悪し	……	悪しき人	……	悪しけれど

右の如く、その詞の末の變化するを形容詞の活用といひ、さて、その變化する部分を語尾といひ、その變化せざる部分を語根といふこと、なほ、動詞の如し。

◎左の文章中の形容詞を摘出せよ。

- 一 兎は前足短くして、後足長し。
- 二 凹凸多き山路を歩むは苦しきものなり。
- 三 日は暖く風もなく、散歩にはよき日なり。
- 四 貧しき人と、卑しき人とは、他より侮らるゝこと多し。
- 五 白き花と、赤き花とは、いづれが美しきか。
- 六 遠き彼方の山陰に、少しく烟の立ち上るが見ゆ。

○形容詞の中には、他の品詞の下に、種々の接尾語の添はりて成れるものあり。

男らし	愛らし	雄雄し	女女し	勇まし
痛まし	愛でたし	隔てがまし		

○又、數單語の熟合して、一の形容詞となれるものあり。

○口惜し 心憂し 見安し 聞き苦し か弱し
うち捨て難し 薄暗し 淺黒し

右の例の「薄暗し」「淺黒し」などの如く、形容詞が重りて一の熟語の形容詞となる時は、大方上の形容詞の語尾は省かれて、その語根より直に下の形容詞に續くものなり。

○形容詞には、その語尾が省かれて、名詞となるもの少からず。

あか(赤) しろ(白) くろ(黒) あを(青)

○又、その語尾が省かれて、更に、「み」「さ」「げ」等の接尾語の添はりて名詞となるものあり。

おも(重)み あつ(厚)み きよ(清)さ さむ(寒)さ

かなし(悲)げ うれし(嬉)げ

○又、その語尾が省かれて、直に他の名詞と熟合して、一の名詞となるものあり。

とほ(遠)山 うす(薄)色 うれし(嬉)涙

面なが(長) 手みじか(短) 幅ひろ(廣)

○又、その語尾が省かれて、下に「がる」「ぶる」「らぐ」「やぐ」「だつ」「ぶ」がまし「けし」等の接尾語の添はる時は、動詞、又は、形容詞となるものなり。

さむ(寒)がる たか(高)ぶる うす(薄)らぐ

わか(若)やぐ おも(重)だつ ふる(古)ぶ

あつ(厚)がまし さむ(寒)けし

◎左の文章中より形容詞を摘出せよ。

- 一 大人しき人は愛せられ、荒々しき人は憎まる。
- 二 彼は色淺黒く、細長き顔にて、骨格逞しき人なり。
- 三 海邊は空氣清く、氣候暖くして、大いに衛生によろし。
- 四 涼しき波風、ま白き帆影、目に入るもの皆清し。
- 五 叔父は堅苦しき人なれど、叔母は見るから優しき人なり。
- 六 あたりに人氣もなく、ほの暗き燈の影、物淋しく輝けり。

第六章 體言 用言

○名詞は事物の名を表し、代名詞はその代りに用ひらるゝ語にて、共に事物の體を表すものなれば、總稱して之を體

言といひ、又、動詞は事物の動作・存在等を表し、形容詞はその有様を形容する語にて、共に事物の用を表す語なれば、總稱して之を用言といふ。

○用言は下の語につゞくるために、その語尾の活用するものなること、已に述べたるが如し。

鳴	か	き	く	け	こ
落	た	ち	つ	て	と
流	ら	り	る	れ	ろ
			つ-つ-つ れる		
			る-る-る れる		

五十音圖は例言の次にあり。参照すべし。

清		烈	
か	さ	か	さ
き	し	し	し
く	す	しく	す
けれ	せ	しけれ	せ
こ	そ	こそ	そ

右の如く、用言の中、動詞の方は五十音圖の同行音にのみ活用すれども、形容詞の方は、その加行・佐行に跨りて活用するものなり。

○動詞・形容詞の名は、意味の上よりつけたるものなれども、その區別は、主としてその活用の形によるものなり。例へば、左例の如き意味の相對する語にても、その活用の形によりて、一は動詞、一は形容詞とするが如し。

(動詞) 有り 富む 老ゆ

(形容詞) 無し 貧し 若し

○「善く」「悪しく」など、形容詞の語尾が「く」に活用し、その下に動詞の「あり」が添はりて、「善くあり」「悪しくあり」などあるべきを、「く」と「あ」と約りて「か」となり、「善かり」「悪しかり」などいふ熟語を成すことあり。かゝる熟語を形容動詞と名づけ、動詞の一種と見なす。

長くあり……………長かり

浅くあり……………浅かり

赤くあり……………赤かり

涼しくあり……………涼しかり

悲しくあり……………悲しかり
樂しくあり……………樂しかり

◎左の文章中より、動詞・形容詞・形容動詞を摘出せよ。

- 一 嚴しく取り締りたれば、違犯者も少かりき。
- 二 暑からず、寒からず、誠によき氣候なり。
- 三 昨夜の暴風は強かりしが、損害はさほどにもあらず。
- 四 苦しみに堪へずば、樂しみも得難からむ。
- 五 口にいふ事は少くして、身に行ふ事は多かれ。
- 六 風俗は同じからずといへども、人情には差異なかるべし。
- 七 善かれ悪しかれ、運を天に任せて、勇ましく進まむ。

第七章 助動詞

○一 「母には死なれ、父には捨てらる」の「れ」「らる」などは、上の動詞に添ひて、その意義を助くる語なり。

二 「人を怨みず、自らを責むべし」の「ず」「べし」なども、上の動詞の意義を助くる語なり。

右の如く、動詞に添ひて、その意義を補ひ助くる語を助動詞といふ。但し、助動詞には、稀に名詞・代名詞・形容詞などにも添はるものあり。

東京は日本の首府なり
父は大藏大臣たり

第一の勉強家は彼なり

彼の人は性質は善きなり

○助動詞は、又他の助動詞の下にも添はるものなり。

教へられたりき

憐ませられたりけり

褒められたるなるべし

○助動詞は、動詞・形容詞などの如く、活用するものなり。

讀ま しめむ……しむ……しむる時……しむれば

受け させむ……さす……さする時……さすれば

聞き たらむ……たり……たる時……たれば

云ふ べくば……べし……べき時……べけれど

助動詞

○今の普通文に用ひらるゝ助動詞は、主に左の二十一なり。

る らる すす すす しむ ず じ つ ぬ
たり けり き けり む らむ けむ べし
まじ なり たし ごとし

○これ等の助動詞を、その表す意義によりて分類し、左に例示すべし。

一 受身の意を表すもの

る 孤兒が人に救はる

る 風に帽子を取らる

らる 盜賊巡査に捕へらる

らる 妹は母に愛せらる

二 可能の意を表すもの

る 船にても行かる

る 片足にても歩まる

らる 改めむとすれば改めらる

らる 誰にも容易に考へらる

●可能の助動詞は、更に轉じて、「繰り言のみいはる」故郷の事のみ思ひ出でらる」などの如く、その動作の自然に起りて止み難き意に用ひらるゝことあり。

●受身の助動詞と可能の助動詞とは、全く同形にて、兩様の意義を表すものなれば、よろしく文章の意義に注意して、之を識別すべし。

三 使役の意を表すもの

す 生徒に水泳を習はす

す 父子供等に手紙を書かす

さす 下男に塵を捨てさす

さす 弟に算術の難問を考へさす

しむ 病人に薬を吞ましむ
人をして彼にその不心得を諭さしむ

●使役の助動詞は、下に受身の助動詞の「らる」を添へて「習はせら

四 崇敬の意を表すもの

る「捨てさせらる」「吞ましめらる」など、他に使役せらるゝ意を表すことあり。

る 父上は東京に行かる

る 殿下は御馬にて川を渡らる

らる 公爵は非常に書畫を愛玩せらる

らる 母上は毎朝未明に起き出でらる

す 主上都を出で立たす

さす 姫君は朝夕琴を弾ぜさす

す 殿下は和歌を好ませらる

さす 天皇陛下も臨幸せさせ給ふ

しむ 皇太子御位に即かしめらる
皇后陛下も行啓せしめ給ふ

●「す」「さす」「しむ」が崇敬の意を表すに用ひらるゝ時は、その下に「らる」「給ふ」などの語を添ふるを常とす。

●崇敬の助動詞は、可能の助動詞及び使役の助動詞と全く同形にして、その意義のみ變れるものなれば、よろしく文章の意義に注

五

否定の意を表すもの

ず

花咲かず
山の姿も見えず

じ

我はしか思はじ
徒歩競争ならば誰にも負けじ

六

時を表すもの

つ

心はちぢにかき亂れつ
計らず友に出で遇ひつ

ぬ

櫻も桃も咲き揃ひぬ
さめざめと泣き出でぬ

たり

夜はしらじらと明けたり
人人眠に就きたり

り

弟と共に學校より歸れり
首尾よく試験に及第せり

き

昔一人の翁ありき
少年は泣いて語りき

けり

智略に富みけり
花も散り果てけり

む

午後には風吹き出でむ
勉めて止まずは何事も成就せむ

ずは動詞の「あり」と連り約りてざりとなることあり。

むはんと發音す。従つてんとも書く。

七

推量の意を表すもの

らむ

月や出づらむ
花の散るらむ

けむ

洋學は何時頃より興りけむ
彼の祖先は何者にてありけむ

べし

今の苦は後の樂なるべし
水も流れずば腐るべし

まじ

學問は廢すまじ
忍び難き事もあるまじ

らむけむはらんけんぞ發音す。従つてらんけんとも書く。べしは動詞の「あり」と連り約りてべかりとなることあり。

八

指定の意を表すもの

なり

美しき心なり
花の散るなり

たり

父は陸軍大將たり
古今に稀なる名匠たり

●指定の助動詞「たり」と時の助動詞「たり」とは同形なれど意別なれ

ば、誤り混ざることなかれ。但し、指定の助動詞「たり」は名詞につき、時の助動詞「たり」は動詞につくものなり。

九 希望の意を表すもの

早く歸りたし
たし
行きて見たし

十 比況の意を表すもの

手に取るごとし 光陰は矢のごとし
ごとし 汽車の走るがごとし 水の清さがごとし
●「ごとし」は、中に「の」又は「が」を挟みて、上の名詞・動詞・形容詞などに接すること多し。

◎左の文章中の助動詞を抽出し、且つ、その意義を説明せよ。

- 一 皇子殿下には箱根に御避暑遊ばせらる。
- 二 東京に往きたしと思へど、父の許しを得らるまじ。
- 三 父母の教訓をよく守りて、至孝なりき。
- 四 眠らむとすれど眠られず。
- 五 己自ら先んじて實行せば、何事も人に勵行せしむることを得む。
- 六 吉田松陰先生のごときは、眞の國士なりといふべし。
- 七 空言はいはじと念ずれど、心弱くもその掟を破る事なきにあらず。
- 八 人に笑はれむが恥かして、門を閉ぢさせ、家の奥深く隠れ居たるを、遂に見出されけり。
- 九 冬に至りぬれば、日短くなりて、課もまだ満たぬに、日暮れむとする事度々なりき。
- 十 家富みたりとて誇るべき事にあらずと諭されぬ。

第八章 助詞

○一 「犬が猫を追ふ」の「が」「を」などは、上の語に添ひて、之を助けて下の語との關係を示す語なり。

二 「肉のみ食ふとも胃を害ふこと無きか」の「のみ」「とも」「か」などは、上の語につきて或意義を添へ、他語との關係をいよく明かにする語なり。

右の如く、上の語に添ひて、之を助けて他語との關係を表す語を助詞といふ。

○今の普通文に用ひらるゝ主なる助詞を、その表す意義によりて分類し、左に例示すべし。

助詞は又てにを
はともいふ。

一 上下の語の關係を示すもの

人の家

の 風の吹く

を 花を折る

を 人を訪ふ

へ 前へ向く

へ 都へ上る

まで 頂上まで登る

まで 心まで腐る

君が代

が 花が咲く

に 車に乗る

に 山に登る

より 遠方より來る

より 雪より白し

天つ神

つ 沖つ波

と 妹と遊ぶ

と 花雪と散る

から 心からおもふ

から 口から出づ

●「に」は位置を示す助詞にして、「へ」は方向を示す助詞なり。故に、「前に向く」「馬へ乗る」などいふは誤りと知るべし。

二 種々の意義を添ふるもの

は 朝は寒し

は 弟には優る

も 葉も美し

も 犬にも劣る

のみ 我のみ知る

のみ 心にも思ふ

三 接續の用をなすもの

●「だに」すらは、輕きを舉げて重きを言外におもはしむる意の助詞。「さへ」はあるが上に更に更に添ひ加はる意の助詞なれば注意して混用せざるやうにすべし。

ばかり 水ばかり吞む
思ふばかりぞ
だに 水だに吞まず
鳥にだにしかず
すら 草木すら情あり
親すら養はれず

さへ 雨降り風さへ吹く
貧さへ加はる
折しもあれ
君ぞ知るらむ
し 折しもあれ
いっしかと待たる
ぞ 慎しむべき事ぞ

なむ 花なむ散る
都になむ住む
こそ 年こそ若けれ
人にこそよれ

ば 風吹けば寒し
問はば答へむ
ど 呼べど答へず
品よけれど價高し
ども 見れども見えず
幼けれども力強し

とも 悔ゆとも及ばじ
死すとも怨みなし
て 雨霽れて虹立つ
日暮れて家に歸る
で 行かて歸る
讀まで止む

四 疑問の意を表すもの

美しくして光あり
問はずして知るべし
見かへりつつ行く
語りつつ笑ふ

が 雨は停みしが風いよいよ烈し
終日待ちけるが遂に姿見えず
友を訪ねしに不在なりき
日暮れたるに暑さ去らず

を 吾はしか思ふを君はいかに
樂しき世なるを憂しと歎くは愚なり
に 友を訪ねしに不在なりき
日暮れたるに暑さ去らず

や 夜や明けぬらむ
叔父上は家に在りや
か 何をか恨みむ
何處へ行くか

五 命令の意を表すもの

速に答へよ
よく考へよ
な 勉めて怠るな
罪を犯すな

六 感動の意を表すもの

かし	思へかし	世の常ぞかし
も	大君はいとも畏し	樂しくもあるかな
や	美しき花や	忝き御志なりや
な	汝は臆したりな	いとど悲しな
は	何かはせむ	さる事あらむやは
か	かな	大なるかな
		美しき心かな
よ	たよりなき心細さよ	元祿の頃かとよ

右に示せるが如く、助詞の中には、同形にして意義の異なるもの多ければ、特に注意して、その意義を混淆することなかれ。

○助詞はいくつも重り合ひて用ひらるゝこと多し。
 我には彼よりも重き責任あり
 心をは鎮めて考へられよや

はがをの下に添
 はる時は、ばさ
 なるさ知るべ
 し。

人にして鳥獸にだにしかざるものあり
 我こそは無官の大夫敦盛なれ
 右の如く用ひられたる助詞は、それらの助詞の意義を
 重ねたるものと知るべし。

○又、「に」「と」「を」等の助詞の下に、「て」「して」の添はりて表
 るゝことあり。

木にて造る
 困難とてなし
 人にして人にあらず
 子としてあるまじきことなり
 義經をして平氏を討たしむ

右の如く用ひられたる「にて」「とて」「にして」「として」「を」して等は、一の熟合せる助詞と見なすをよしとす。

◎左の文章中の助詞を摘出し、且つ、その意義を説明せよ。

- 一 君はこれより何處まで行き給ふか。
- 二 月を見つゝ昔を語らむと思ひて、君をば訪へるなり。
- 三 怠らず勉強せよ。勉強は幸福の母なり。
- 四 曇りたるだに寒さを、風さへ加はりて堪ふべくもなし。
- 五 父の許よりも、疾く歸れといふ電報ありたれば、明朝一番汽車にて郷里に歸るべし。
- 六 いかにも隠すとも、遂には顯れざるべきか。
- 七 盛なるかな、明治の御代や。たゞに商工業の發達せるのみならず、教

育の道も、亦おほいに開けぬ。

- 八 人と生れて禮を知らずば、鳥にだにしかずといふべし。
- 九 彼をして今の世に生れしめば、國家に貢獻せし所も多かりしならむ。
- 十 惜しいかな、彼は不幸にして短命なりき。
- 十一 日は暮れたるに、宿るべき家としてはなし。
- 十二 兄弟とこそいへ、性質は雪と炭とのごとく甚だしく相違せるぞよ。
- 十三 君が代は千代に八千代に、さゞれ石の巖となりて、苔のむすまで。

第九章 副詞

○一 「暫く考へて漸く答ふ」の「暫く」「漸く」などは、下の動

○ 詞「考へ」「答ふ」などの意義を限定せる語なり。

二 「山はいよいよ高く路はまゝです。険し」の「いよいよ」「まゝです」などは、下の形容詞「高く」「険し」などの意義を限定せる語なり。

右の如く、動詞・形容詞の意義を限定するに用ひらるゝ語を副詞といふ。

○ 副詞は、又、他の副詞の上に添はりて、その意義を限定することあり。

やや暫く考へ居たり

いと細やかに物語りぬ

右の如く、二の副詞の連る場合には、之を合せて一の副詞

と見るもよし。

○ 副詞は、又、中に他の語を隔て、下の動詞・形容詞の意義を限定することあり。

暫く時の到るを待て

既に夜も更けたり

幸にして虎口を脱せり

○ 副詞には、本来のものもあれど、名詞・動詞・形容詞、又は、これに助詞の添はりたる熟語より轉じ來れるもの、殊に多し。

一 本来のもの

甚だ面白し

頗る善し

忽ち來る

稍や劣る

只管思ふ考ふ 専ら用ふ修む 猶多し有り

二 他語より轉じ來れるもの

終夜眠らず語らふ 餘り寒し少し 善く戰ふ習ふ 久しく休む

僅に見ゆ覺ゆ 極めて白し 度度來る催す 日目に長ず衰ふ

次第次第に衰ふ肥ゆ 巍然として立つ聳ゆ 斷然と拒絶す辭退す

不幸にして死す失敗す 思ふままに振舞ふ書きたり

右はその一斑を示せるのみ。他は推して知るべし。

◎左の文章中の副詞を摘出し、且つその副詞がいづれの語を限定せるかを説明せよ。

一 曾て、先生に聞きしことあり。

二 風そよ／＼と吹きて、やう／＼秋めきたり。

三 なほ尋ねべき事あれば、暫く待たれよ。

四 しば／＼彼に訪はるれど、我は未だ彼の家を訪はず。

五 しほ／＼と語るゝを聞き、いよ／＼あはれを催したり。

六 いかなる僻邑にも、必ず學校の設ありて、教育の事、頗る盛なり。

七 夜も最早明けたるにや、人聲かすかに耳に入る。

八 志を立て、只管勉強せば、終には成業の日あるべし。

九 聊か思ふよしあれば、専ら音楽を修むべし。

十 たゞ物を學ぶのみにて、應用する才なくば、少しも學ばざるに等し。

○「善く」「悪しく」など、副詞として用ひらるゝ形容詞が、下の

○動詞「あり」に連り約りて、「善かり」「悪しかり」などいはるるものを形容動詞といふこと前に述べたり。(二七頁参照)

○詳細に「爛漫と」など、「に」又は、「と」にて終る副詞もまた、下の動詞「あり」に連り約りて、「にあり」「とあり」が「なり」「たり」となり、「詳細なり」「爛漫たり」といはるゝことあり。かゝる熟語もまた、形容動詞といふ。

鮮明にあり……………鮮明なり
 深切にあり……………深切なり
 大いにあり……………大いなり
 駸駸とあり……………駸駸たり
 憤然とあり……………憤然たり

確乎とあり……………確乎たり

第十章 接續詞

○一 「山又山」書を讀み且つ字を習ふの「又」「且つ」などは二の語句を接續せしむる語なり。

二 「雨烈しされど風は靜かなり」の「されど」などは、二の文章を接續せしむる語なり。

右の如く、二の語句・文章などを接續するため、その間に挟みて用ひらるゝ詞を接續詞といふ。

○接續詞の中には、まゝ、上の語句に附屬して表るゝものあり。

御相談申し上げたく候ふ間明朝御來車のほど願ひ
上げ候ふ

不順の時候に候ふ處御機嫌いかがに候ふや

○接續詞にも、また、本來のものと、他語より轉じ來れるもの
とあり。

一 本來のもの

また 且つ 則ち 但し

○二 他語より轉じ來れるもの

及び よりて 故に 随つて 或は 然れども
さる程に 此に於て 況んや

右はその一斑を示せるのみ、他は推して知るべし。

◎左の文章中の接續詞を摘出せよ。

- 一 霞か、雲か、はた雪か。
- 二 明日は、雨若しくは雪となるべし。
- 三 知りて行ひしか、抑も亦知らずしてか。
- 四 場内極めて狭し。されば、何人も容易に入場を許されず。
- 五 甲乙及び丙は賛成したり。然れども丁は遂に之に反對せり。
- 六 修學の餘暇には、撃劍、或は弓術などを習ひ、而して、身心を鍛鍊すべし。
- 七 敵は小勢なり。さりながら侮り難し。
- 八 不都合少からず候條、自今十分に注意せらるべく候。

第十一章 感動詞

○一 「ああ大なるかな」の「ああ」は、心に感動して發する語なり。

二 「すは火事よ」「あな悲し」などの「すは」「あな」なども、感動の語なり。

右の如く、心に感動して發する語を感動詞といふ。

○文章に多く用ひらるゝ感動詞は、おほむね左の如し。

- ああ あな あはれ あはや あなや
- すは いで いざ いでや いざや
- あら おお

◎左の文章中の感動詞を摘出せよ。

- 一 嗚呼、盛なるかな、彼の聲望や。
- 二 しづかに眠れ。やよ、子供。
- 三 すは火事よと、起き出でたり。
- 四 あはや、海底の藻屑とならむとす。
- 五 いざ、諸共に出で行かむ。
- 六 いでや、何ばかりの事かあらむ。
- 七 おお、未怖ろしき少年よ。
- 八 いであはれ、いかなる禍神のか、かくあらび給ふにか。あなあさましの世や。

第十二章 動詞の語形

○動詞は下の語につゞくるために、その語尾活用して種々の語形に變ずるものなること、已に學びたるがごとし。これ等の語形を、その用ひ方によりて未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形と名づく。

- 一 「雨降らば中止せむ」「死なば苦を忘るべし」の「降ら」「死な」などの如く、助詞「ば」に接して假に定めていふ意を表すに用ふる語形を未然形といふ。
- 二 「花咲き匂ふ」「心亂れ易し」の「咲き」「亂れ」などの如く下の動詞形容詞、即ち用言につゞくるに用ふる語

連用形は「花咲き鳥鳴く」「政亂れ國衰ふ」などの如く、下の文にいひ續くる時にも用ひらる。これを中止形とも稱す。

形を連用形といふ。而して連用形は動詞が轉じて名詞となる語形なり。

- 三 「水流る」「霜天に滿つ」の「流る」「滿つ」などの如く、文章をそのまゝ、結び止むるに用ふる語形を終止形といふ。この語形を動詞の本體とす。

- 四 「賞を受くる人多し」「雲の靡く彼方を見よ」の「受くる」「靡く」などの如く、下の名詞・代名詞、即ち體言につゞくるに用ふる語形を連體形といふ。

- 五 「風吹けど雨霽れず」「車を馳すれど追ひつかず」の「吹け」「馳すれ」などの如く、助詞「ど」に接して確と定めていふ意を表すに用ふる語形を已然形といふ。

六 「早く行け」「速に答へよ」の「行け」「答へ」などの如く、

命令の意を表すに用ふる語形を命令形といふ。

○以上述べたる未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六の語形は、いづれの動詞にもあるものなり。今、左に二三の例を擧げて、之を表示すべし。

終止形と連體形と、又、已然形と命令形と同じきもの

問	立	押	書	
は	た	さ	か	未然形
ひ	ち	し	き	連用形
ふ	つ	す	く	終止形
ふ	つ	す	く	連體形
へ	て	せ	け	已然形
へ	て	せ	け	命令形

未然形と連用形と命令形と同じきもの

未然形と連用形と命令形と、又、終止形と連體形と同じきもの

未然形と命令形と同じきもの

一も同じき形のもの

死	往	(爲)	(來)	(蹴)	(射)	(見)	受	覺	懲	報
な	な	せ	こ	け	い	み	け	え	り	い
に	に	し	き	け	い	み	け	え	り	い
ぬ	ぬ	す	く	ける	いる	みる	く	ゆ	る	ゆ
ぬる	ぬる	する	くる	ける	いる	みる	くる	ゆる	る	ゆる
ぬれ	ぬれ	すれ	くれ	けれ	いれ	みれ	くれ	ゆれ	るれ	ゆれ
ね	ね	せ	こ	け	い	み	け	え	り	い

連用形と終止形と
又、已然形と命令
形と同じきもの

居	有
ら	ら
り	り
り	り
る	る
れ	れ
れ	れ

●表中括弧を附せる動詞は、一音にて成り、語根・語尾を別つこと能はざるものなり。

右の如く、動詞はその語尾の活用まち／＼なる上に、同一の語形が二三の用を兼ねるもの多くして、甚だ記憶に便ならず。されば、或動詞の六の語形を知らむとせば、まづ、左の如く「む」「たり」「○」「時」「ど」「よ」と記しおきて、その動詞よりこれ等の語にいひつゝ、けて見るをよしとす。この方法による時は、いかなる動詞も、直にその六の語形を知ることを得べし。但し動詞によりては、「書け」「押せ」「死ね」な

どの如く、「よ」を添へずして命令形を表すものありと知るべし。

(讀)

よま	む	未然形
よみ	たり	連用形
よむ	○	終止形
よむ	時	連體形
よめ	ど	已然形
よめ	(よ)	命令形

(見)

み	む	未然形
み	たり	連用形
みる	○	終止形
みる	時	連體形
みれ	ど	已然形
み	よ	命令形

- ◎左の文章中の動詞が何形の語形に表れ居るかを説明せよ。
- 一 早く行かば、刻限には間に合はむ。
 - 二 船に乗れど、酔ふことなし。

- 三 恩を受けば、必ず報いよ。
- 四 木まづ朽ち果てて、蟲これに生ず。
- 五 恥づることを知らざるは、自ら身を辱むるものなり。
- 六 財貨は盡くる事あれど、芳名は朽つることなし。

◎左の動詞の六の語形を挙げよ。

考ふ 榮ゆ 寄す 學ぶ 衰ふ 分つ 捨つ
 射る 笑ふ 祝ふ 流る 行く

第十三章 動詞の活用

○動詞を、その活用の異同により分類して、四段活用・上二段活用・下二段活用・上一段活用・下一段活用・加行變格活用・左行變格活用・奈行變格活用・良行變格活用の九種とす。

○一 四段活用

	ア	イ	ウ	エ	オ
書	か	き	く	け	(こ)
指	さ	し	す	せ	(そ)

右の如く語尾が五十音圖中の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用するものを四段活用の動詞といふ。

○四段活用の動詞は、終止形と連體形と同じく、又、已然形と命令形と同じきものなり。即ち、左例の如し。(五八頁の表参照)

四	動	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
		か	き	く	く	け	け

四段活用の動詞は「カ」「サ」「タ」「シ」「イ」「ラ」の六行に活用す。

用 活 段			
破	包	打	押
ら	ま	た	さ
り	み	ち	し
る	む	つ	す
る	む	つ	す
れ	め	て	せ
れ	め	て	せ

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

他く	致す	言ふ	遊ぶ	歩む	眠る	歎く
交る	勇む	富む	祝ふ	誘ふ	勝つ	待つ
消す	費す	描く	放つ	争ふ	走る	破る
讀む	習ふ					

○二 上二段活用下二段活用

起	
ア	(か)
イ	き
ウ	く-く-く れる
エ	(け)
オ	(こ)

捨	
ア	(た)
イ	(ち)
ウ	つ-つ-つ れる
エ	て
オ	(と)

上二段活用の動詞は「カ」「タ」「ハ」「マ」「ヤ」「ラ」の六行に活用す。

右の前例の如く、語尾が五十音圖中の「イ」「ウ」の二段と、なほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものを上二段活用の動詞といひ、後例の如く、「ウ」「エ」の二段となほ、

下二段活用の動詞は「ア」「カ」「サ」「タ」「ナ」「シ」「ヤ」「ラ」「ワ」の十行に活用す。

その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものを下二段活用の動詞といふ。これ同じく二段の活用なれども、一は五十音圖中の上方の二段に活用し、一はその下方の二段に活用するを以て、かく區別せるものなり。

○上二段活用下二段活用の動詞は、未然形と連用形と命令形と同じきものなり。即ち左例の如し。(五九頁の表参照)

用活段二上			
懲	老	落	未然形
り	い	ち	連用形
り	い	ち	終止形
る	ゆ	つ	連體形
るる	ゆる	つる	已然形
るれ	ゆれ	つれ	命令形
り	い	ち	

用活段二下		
止	教	受
め	へ	け
め	へ	け
む	ふ	く
むる	ふる	くる
むれ	ふれ	くれ
め	へ	け

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

過ぐ	閉づ	恥づ	醒む	悔ゆ	下る	朽つ
帶ぶ	亡ぶ	盡く	生く	起く	怖づ	
告ぐ	忘る	流る	聳ゆ	留む	治む	交ふ
換ふ	尋ぬ	秀づ	仰す	出づ	與ふ	

○三 上一段活用下二段活用

上一段活用の動詞は「カ」「ナ」「ハ」「マ」「ヤ」の六行に活用す。

(見)	ア	段
(ま)	イ	段
み-み-み れる	ウ	段
(む)	エ	段
(め)	オ	段
(も)		段

(蹴)	ア	段
(か)	イ	段
(き)	ウ	段
(く)	エ	段
け-け-け れる	オ	段
(こ)		段

右の前例の如く、語尾が五十音圖中の「イ」段となほ、その「イ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものを上一段活用の動詞といひ、後例の如く、「エ」段となほ、その「エ」段に「る」

「れ」の添はりて活用するものを下一段活用の動詞といふことも亦、五十音圖中の上方の一段に活用すると、下方の一段に活用するによりて區別せるものなり。但し、下一段活用の動詞は右の「蹴る」の一語のみなり。

○上一段活用下一段活用の動詞は未然形と連用形と命令形と同じく、又終止形と連體形と同じきものなり。即ち左例の如し。(五九頁の表参照)

段一上		未然形
(著)	き	連用形
(煮)	に	終止形
	に	連體形
	にる	已然形
	にる	命令形
	にれ	
	に	

活下	用活
一段	一段
(蹴)	(射)
け	い
け	い
ける	いる
ける	いる
けれ	いれ
け	い

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

見る 干る 似る 鑄る 顧みる 率ゐる

○四 加行變格活用佐行變格活用

(來)	ア	段
(か)	イ	段
き	ウ	段
く-く-く	エ	段
れる	オ	段
(け)		
こ		

(爲)	ア	段
(さ)	イ	段
し	ウ	段
す-す-す	エ	段
れる	オ	段
せ		
(そ)		

右の前例の如く、語尾が五十音圖中の「イ」「ウ」「オ」の三段となほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものは、たゞこの加行の「來」の一語のみにて、後例の如く、「イ」「ウ」「エ」の三段となほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものも、亦この佐行の「爲」の外に、同行の「おはす」の一語あるのみなれば、これ等の小數の動詞を變格の活用として、前者を加行變格活用の動詞といひ、後者を佐行變

格活用の動詞といふ。

○加行變格活用・佐行變格活用の動詞は、未然形と命令形と同じきものなり。即ち左例の如し。(五九頁の表参照)

加行變格活用	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(來)	こ	き	く	くる	くれ	こ
佐行變格活用	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せ

○佐行變格活用の本來の動詞は、「す」「おはす」の二語のみなれども、名詞が「す」と合して、一の熟語の動詞となるものは、すべてこの活用に屬するものなり、即ち左例の如し。

佐行變格活用				
罪	論	進歩	發達	
せ	ぜ	せ	せ	未然形
し	じ	し	し	連用形
す	ず	す	す	終止形
する	ずる	する	する	連體形
すれ	ずれ	すれ	すれ	已然形
せ	ぜ	せ	せ	命令形

○又左例の如く「す」の上に副詞の添はれるものも、この活用に屬せる熟語の動詞と見なすも妨げなし。

審かにす 明かにす 善くす 辱くす
 全うす 潔うす 重んず 甘んず

●右の「全うす」「潔うす」「重んず」「甘んず」のごときは、もと、「全くす」

「潔くす」「重くす」「甘くす」といふべきを、發音の便より「く」を「う」「ん」に呼びかへたるものなり。委しくは後の第二十一章に説くべし。

◎左の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

- 競争す 議論す 熟考す 休息す 一致す 奮闘す
- 奔走す 解す 制す 發す 辯ず 講す 歎す
- 蛇蝎視す 田舎化す

○五 奈行變格活用

死	ア	段	イ	段	ウ	段	エ	段	オ	段
な										
に										
				ぬ-ぬ-ぬ						
				れる						
						ね				
								(の)		

死ぬいふ動詞
は死なに死ぬ
ぬ死れと、四
段活用の動詞さ
しても用ひら
る。

右の如く、語尾が五十音圖中の四段となほ、その「ウ」段に「る」「れ」の添はりて活用するものは、この奈行の「死ぬ」の外に、同行の「往ぬ」の一語あるのみ。故に、これ等もまた變格の活用として、奈行變格活用の動詞といふ。
○奈行變格活用の動詞は、その活用に一も同じき語形なきものなり。即ち、左例の如し。(五九頁の表参照)

奈行變格活用	死	往	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	死	往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	な	な	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

○六 良行變格活用

居りこいふ動詞
は居ら居り居
る居れこ、四
段活用の動詞と
して用ひら
る。

有	ア	段	イ	段	ウ	段	エ	段	オ	段
ら			り		る		れ		(ろ)	

右の如く、語尾が五十音圖中の四段に活用すること、なほ、四段活用の如くなれども、たゞ、その本體が「イ」段にていひさらるゝものは、この「有り」の外に、同行の「居り」「侍り」の二語あるのみ。故に、これ等も、亦、變格の動詞として良行變格活用の動詞といふ。

○良行變格活用の動詞は、連用形と終止形と同じく、又已然形と命令形と同じきものなり。即ち、左例の如し。(六〇頁の表参照)

良行變格	有	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	有	ら	り	り	る	れ	れ

活用	居
	ら
	り
	り
	る
	れ
	れ

○良行變格活用の本來の動詞は「有り」「居り」「侍り」の三語のみなれども、「有り」が他の品詞と熟合して成れる形容動詞は、すべてこの活用に屬するものなり。即ち、左例の如し。

形容動詞				未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
善	悪し	美麗	爛漫	から	かり	かり	かる	かれ	かれ
	から	なり	たり	かり	かり	かり	かる	かれ	かれ
	なり	なり	たり	かり	かり	かり	かる	かれ	かれ
	なり	なる	たる	かり	かり	かり	かる	かれ	かれ
	なり	なれ	たれ	かり	かり	かり	かる	かれ	かれ
	なり	なれ	たれ	かり	かり	かり	かる	かれ	かれ

◎左の形容動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

静かなり	明かなり	輕妙なり	奇麗なり	長閑なり
逸たり	凜たり	巍然たり	斷乎たり	樂しかり
悲しかり	黒かり	清かり		

○以上述べたる九類の活用中、上一段・下一段・加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格の六の活用に屬する動詞は、僅に左の數語に過ぎざれば、悉く之を諳記すべし。

試みるといふ動詞は、試み、試む、試むと、上一段活用の動詞としても用ひらる。

上一段活用

著る	煮る	似る	干る	見る <small>(試みる、願みる、鑑みる)</small>
射る	鑄る	居る	率る	

下一段活用

蹴る

加行變格活用

來ク

佐行變格活用

爲ス おはす(この外、名詞が「爲」と熟合して動詞となれるものは、すべてこの活用に屬すと知るべし。)

奈行變格活用

死ぬ 往ぬ

良行變格活用

有り 居り 侍り(この外、形容動詞は、すべてこの活用に屬すと知るべし。)

●加行變格・佐行變格・奈行變格・良行變格は、略して加變・佐變・奈變・良變ともいふ。

○四段・上一段・下一段の三の活用に屬する動詞は、その數も多く、随つて互に紛れ易し。今、之を識別するには、左の便法によるをよしとす。

- 一 「書かむ」「讀まむ」「習はむ」などの如く、その未然形が「ア」段に活用するものは、四段活用の動詞なり。

用ふといふ動詞は、用ひ、用ぬる用ぬれと、上一段活用の動詞としても用ひらる。

もの代りにずを添へて見るもよし。

- 二 「落ちむ」「生きむ」「朽ちむ」などの如く、その未然形が「イ」段に活用するものは、上二段活用の動詞なり。
- 三 「考へむ」「集めむ」「消えむ」などの如く、その未然形が「エ」段に活用するものは、下二段活用の動詞なり。

◎右の方法によりて、左の動詞の活用を類別せよ。

- 越ゆ 籠る 懸く 起く 開く 亂る 病む
- 照す 流る 込む 留む 榮ゆ 忍ぶ 戒む
- 見ゆ 撫づ 語る 恥づ 悔ゆ 泣く 閉づ
- 出づ 入る

第十四章 形容詞の活用及びその語形

○形容詞も、動詞の如く、下の語につゞくるために、その語尾が五十音圖中の加行・佐行に跨りて、「き」「く」「けれ」「し」の四に活用するものなること、已に學びたるが如し。(三六頁参照)

これ等の語形をその用ひ方によりて、未然形・連用形・終止形・連體形・已然形と名付け、而してその終止形を形容詞の本體とすること、なほ、動詞の如し。但し、形容詞には命令形なし。即ち左表の如し。

	近	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
廣	く	く	く	し	き	けれ	○
	く	く	く	し	き	けれ	○

語根に「し」を含む形容詞を志久活の形容詞といひ、他を久活の形容詞といひて兩者を區別することあり。

悪し	美し	嬉し	淺
く	く	く	く
く	く	く	く
(し)	(し)	(し)	し
き	き	き	き
けれ	けれ	けれ	けれ
○	○	○	○

右の表中の「嬉しく」「美しく」「悪しく」などの如く、語根に「し」を含む形容詞の終止形は、語尾の「し」を略して、「嬉し」「美し」「悪し」などいふが常なり。但し、「嬉しし」、「悪しし」などと慣用せらるゝものは、これに従ふも妨げなしとす。

○形容詞は、未然形と連用形と、その語形同じきものなり。而して、その連用形は、形容詞が轉じて副詞となる語形なり。

◎左の形容詞を活用せしめて、その五の語形を表に作りて見よ。

樂し	低し	涼し	清し	暗し	美し	尊し
悲し	苦し	白し	黒し	長し	賤し	貧し
うら若し	いち早し	見にくし	聞きぐるし			

◎左の文章中の形容詞を摘出し、その何形の語形に表れ居るかを説明せよ。

- 一 この花は珍しけれど、香氣少し。
- 二 古きを温ねて新しきを知る。
- 三 顔は醜しとも姿の正しきものは美しく見ゆるものなれば、假初にも行儀わるき振舞あるべからず。
- 四 貴き人も卑しき人も、同じく日本帝國の臣民なり。
- 五 風涼しく肌に通りて、いと心地よき夕なり。

- 六 空清く晴れて日は暖けれど風未だ寒し。
- 七 物を恵むには、その嵩の多き少きによるべからず、たゞその志の厚きをよしとす。
- 八 蒸し熱く寝苦しき夜なりければ、更闌くるまで端居して涼み居たりき。

第十五章 助動詞の活用及びその語形

○助動詞は、主として動詞に添はりてその意義を助くるものなれば、獨立しては表れぬものながら、又、動詞・形容詞などの如く、下の語につくくるために、種々の活用をなすものなり。随つて又、動詞・形容詞などの如く、種々の語形を具

ふ。

○助動詞の活用には動詞に似たるものあり、形容詞に似たるものあり、或は、全く特殊のものあり。その動詞に似たるものは、大方動詞の語形と同じく、又、形容詞に似たるものは、形容詞の語形に同じ。されば、助動詞の語形は、すべて動詞・形容詞の語形に準じて知るべし。

一 動詞に似たる活用をなすもの

受身 (殺さ)
可能 (覺え)
崇敬

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
れ	れ	る	るる	るれ	れ
られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ

指定		時					使役 敬		
忠誠	良民	流れ	眠れ	咲き	鳴き	痛め	問は	受け	讀ま
なら	たら	(けら)	(ら)	たら	な	て	しめ	させ	せ
なり	たり	(けり)	(り)	たり	に	て	しめ	させ	せ
なり	たり	けり	り	たり	ぬ	つ	しむ	さす	す
なる	たる	ける	る	たる	ぬる	つる	しむる	さする	する
なれ	たれ	けれ	れ	たれ	ぬれ	つれ	しむれ	さすれ	すれ
なれ	たれ	○	○	○	(ぬ)	(て)	しめ	させ	せ

●表中括弧内の活用は、殆ど今文には用ひられぬものと知るべし。
 二 形容詞に似たる活用をなすもの

推量		比況		希望	
見る	悟る	動く	登り	見る	悟る
べく	まじく	ごとく	たく	べく	まじく
べし	まじ	ごとく	たく	べし	まじ
べき	まじき	ごとし	たし	べき	まじき
べけれ	まじけれ	○	たけれ	べけれ	まじけれ
○	○	○	○	○	○

三 特殊の活用をなすもの

否定	
飲ま	飲ま
ず	ず
ぬ	ぬ
ね	ね
○	○

			時		
	推量				
	(煙る)	(歸り)	(榮え)	(散り)	(見え)
○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○
(らむ)	けむ	む	き	じ	
(らむ)	けむ	む	し	じ	
(らめ)	けめ	め	しか	じ	
○	○	○	○	○	○

◎左の文章中の助動詞を指摘し、その何形の語形に表れ居るかを説明せよ。

- 一 夜の明けぬ中に家を出てむ。
- 二 空は曇りたれど、雨は降るまじと思はる。
- 三 民富み國榮えたりしかば、天下平かに治りき。

四 講じ終りし後、ゆる／＼不審の箇所を問ふべしと諭されぬ。

五 彼が口惜しく思ひつるも理ならずや。

六 廣告に勉めしかば、漸くに世に流行する事となれりき。

七 飯も食はる、茶も呑まるとして、少しも病に注意せられず。

八 繪のごとき絶景真に天工の妙を極めたりといふべし。

九 時頼ほどの名君を子に持たれける松下禪尼は、たゞ人にはあらざりけり。

十 秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる。

第十六章 文語 口語

○吾等が日常の談話に用ふる言語は、文章に用ひ來れる言語と異なるところあり。

水 流 る …………… 水 が 流 れ る

よく 勉 む る 人 …………… よく 勉 め る 人

川 風 涼 し …………… 川 風 が 涼 し い

美 し き 花 …………… 美 し い 花

書 を 習 は す …………… 書 を 習 は せ る

明 日 よ り 行 か む …………… 明 日 か ら 行 か う

實 行 せ ら る ま じ …………… 實 行 さ れ ま い

右の上例の如く文章に用ふる言語を文語といひ、又下例の如く談話に用ふる言語を口語といふ。

○口語にも、廣く一般に互りて用ひらるゝものと、一地方に限りて用ひらるゝものとあり。その一般に互りて用ひら

れて標準となるべき語を標準語と稱し、一地方にのみ限りて用ひらるゝ語を方言といふ。こゝには、専ら、その標準語の法則につきて説明すべし。

第十七章 口語の動詞の活用

○口語の動詞の活用は、文語の動詞の活用に比して、その種類少く、僅に、四段活用・上一段活用・下一段活用・加行變格活用・佐行變格活用の五種あるのみ。

四 段 活 用

上 一 段 活 用

下 一 段 活 用

文語も口語も同じき活用なり。

上二段活用 口語にては、上一段活用となる。
 下二段活用 口語にては、下一段活用となる。
 加行變格活用 文語と口語と活用の状異なり。
 佐行變格活用
 奈行變格活用 口語にては四段活用となる。
 良行變格活用
 ○左に、文語と口語との動詞の活用を對比して表示すべし。
 但し、表中、平假名なるは文語の活用にして、片假名なるは口語の活用なり。

四	口語	未然形
四	文語	連用形
讀		終止形
	ま	連體形
	み	已然形
	む	命令形
	め	
	め	

下		段 一 上				段				
段 下		段 二 上		段 一 上		變 六		變 良		段
(蹴)		起		(見)		死		有		
ケ	け	キ	き	ミ	み	ナ	な	ラ	ら	マ
ケ	け	キ	き	ミ	み	ニ	に	リ	り	ミ
ケル	ける	キル	く	ミル	みる	ヌ	ぬ	ル	り	ム
ケル	ける	キル	くる	ミル	みる	ヌ	ぬる	ル	る	ム
ケレ	けれ	キレ	くれ	ミレ	みれ	ネ	ぬれ	レ	れ	メ
ケ	け	キ	き	ミ	み	ネ	ね	レ	れ	メ

變	佐	變	加	段	
變	佐	變	加	段二下	
(爲)		(來)		覺	
セ	せ	コ	こ	エ	え
シ	し	キ	き	エ	え
スル	す	クル	く	エル	ゆる
スル	する	クル	くる	エル	ゆる
スレ	すれ	クレ	くれ	エレ	ゆれ
セ	せ	コ	こ	エ	え

◎左の口語の動詞を活用せしめて、その六の語形を表に作りて見よ。

- 見える 吠える 教へる 與へる 盡さる 報いる
- 勉める 談ずる 兼ねる 流れる 枯れる 落ちる
- 流れる 助ける 斬る 破る 射る

第十八章 口語の形容詞の活用

○口語の形容詞の活用は、文語にて、その語尾が「き」「し」といふべきは「い」となり、「く」といふべきは「う」ともなるものなり。即ち、左表の如し。但し、表中、平假名は文語の活用を示し、片假名は口語の活用を示すものなり。

清		涼し		未然形 連用形 終止形 連體形 已然形
ク	く	ク	く	
ク(ウ)	く	ク(ウ)	く	
イ	(し)	イ	し	
イ	き	イ	き	
ケレ	けれ	ケレ	けれ	

◎左の口語の形容詞を活用せしめ、その五の語形を表に作りて見よ。

嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい
嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい
嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい
嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい
嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい	嬉しい

第十九章 口語の助動詞の活用

○口語の助動詞は、文語の助動詞に比して、その數も少く、活用のさまも簡單なり。但し、口語にのみ用ひらるゝ助動詞もあり。左に主なる助動詞につきて、その活用の異同を表すべし。表中、平假名は文語の活用を示し、片假名は口語の活用を示すこと、前例の如し。

		(見)		(逃げ)		(書か)		(覚え)		(殺さ)		
未然形	れ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	未
連用形	れ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	連
終止形	る	レル	ラレル	る	ラレル	る	ラレル	る	ラレル	る	ラレル	終
連體形	るる	レル	ラレル	るる	ラレル	るる	ラレル	るる	ラレル	るる	ラレル	連
已然形	るれ	レル	ラレル	るれ	ラレル	るれ	ラレル	るれ	ラレル	るれ	ラレル	已
命令形	れ	レ	ラレ	れ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	レ	ラレ	命

(飲ま)		(親友)		(降る)		(言ふ)		(聞き)		(讀ま)	
ズ	ず	ダラ	たら	○	○	まじく	○	たく	○	○	○
ズ	ず	ダッ	たり	(ラシク)	○	まじく	(タク)	たく	○	○	○
ヌ(ン)	ず	ダ	たり	ラシイ	マイ	まじ	タイ	たし	ヨウ	ウ	む
ヌ(ン)	ぬ	○	たる	ラシイ	○	まじき	タイ	たき	○	○	む
ネ	ね	○	たれ	○	○	まじけれ	タケレ	たけれ	○	○	め
○	○	○	たれ	○	○	○	○	○	○	○	○

○ ナク ナイ ナイ ナケレ ○

◎左の口語を、文語に改めよ。

- 一 猿も木から落ちることがある。
- 二 朝早く起きるは、何よりも薬である。
- 三 賤しい言葉を用ひれば、笑はれるぞ。
- 四 そこに見える花は、何といふ花であらうか。
- 五 七に三を加へる時は十になる。
- 六 怨みに報いるに、徳を以てするといふ事もある。
- 七 猥りに塵芥を捨てて、ことを禁じられた。
- 八 才と學と徳とを兼ねた人は、少いものである。
- 九 生きるも死ぬも、共に天命とあきらめるより外はない。

十 財貨は瞬く間に盡さるが、芳名は千歳までも朽ちない。

第二十章 口語の助詞

○口語の助詞は文語と異ならざるもの多し。されば、こゝには口語と文語と相異なるもののみを對照して表示すべし。但し平假名は文語を示し、片假名は口語を示すものなり。

文語	口語	例
に	へ	學校に泊る……………學校へ泊ル 此處に置く……………此處へ置ク

より	のみ	だに	すら	さへ	とも
カラ	バカリ	デモ サヘ	サヘ デモ	マデ	テモ (デモ)
東京より歸る……………東京カラ歸ル 口より吐き出す……………口カラ吐キ出ス	家のみ居る……………家にバカリ居ル 氣のみ急がる……………氣バカリ急ガレル	水だに吞まれず……………水デモ吞マレナイ 立錐の地だになし……………立錐ノ地サヘナイ	本人すら知らず……………本人サヘ知ラナイ 鳥獸すら恩を知る……………鳥獸デモ恩ヲ知ツテ居ル	風さへ吹き出でぬ……………風マデガ吹き出シタ 家さへ失ひぬ……………家マデモ失ツタ	泣くとも許されじ……………泣イテモ許サレマイ 死すとも忘るまじ……………死ンデモ忘レマイ

を	に	で	にして	にて	ども	ど
ノニ	ナガラ	ズニ	テ(ッテ)	デ	ケレドモ	呼ベド答ヘス
雨降るを傘さして行く	冬來れるに綿入なし	書を讀まで眠る	細くして大なり	誰にても爲らる	見れども見えす	呼ブケレドモ答ヘナイ
雨ガ降ルノニ傘ヲサ、ナイデ行ク	冬ガ來タノニ綿入ガナイ	書ヲ讀マナイデ眠ル	堅牢にして廉價なり	誰デモデキル	見ルケレドモ見エナイ	
		學校へ行かて歸れり	病氣にて休む			
		學校へ行カズニ歸ツタ	病氣にて休ム			
		見返りつつ行く	誰にても爲らる			
		見返リナガラ行ク				
		歩きつつ談る				
		歩キナガラ談ル				

よ	や
イロ	カ
考へて見よ	花は咲けりや
此方へ來よ	兄弟ありや
	兄弟ガアルカ
	花ハ咲イタカ
	考へテ見ロ
	此方へ來イ

◎左の口語を、文語に改めよ。

- 一 雨が降つたのに、途はもうかわいて居る。
- 二 先月から眼病で、何事もすることが出来ない。
- 三 鐵砲は何時の頃から吾が國に傳はつたものであらうか。
- 四 名譽ばかりは金錢でも買はれないものだ。
- 五 屢、訓誡するけれども、一向に改心しない。
- 六 話に聞いてさへ身の毛がよだつ。

- 七 用意は整うたのに、船が出ない。
- 八 いくら考へても、名案もあるまい。
- 九 間はないで知れることだ。
- 十 寒くつてもしばらく忍耐しろ。
- 十一 悔んでもかひないことと知りながらも、あきらめられない。
- 十二 獨で旅行する時は淋しいばかりで、面白いことは少しもない。

第二十一章 音便

○動詞を下の「た」「て」などにつゞくる場合に、その語尾が發音の便より他の音に呼びかへらるゝことあり。これを音便といふ。かゝる時は、原音の假名をその呼びかへられた

る音に書きかふるものとす。

- 咲き……咲いた……咲いて
- 書き……書いた……書いて
- 買ひ……買った……買って
- 笑ひ……笑うた……笑うて……笑つた……笑つて
- 勝ち……勝つた……勝つて
- 眠り……眠つた……眠つて
- 休み……休んだ……休んで
- 飛び……飛んだ……飛んで

○形容詞も音便にてその語尾の「き」「い」「く」が「う」に呼びかへらるゝことあり。かゝる形容詞の音便も、また、そ

の原音の假名を書きかふるものとす。

惜しき……惜しいかな

難き……難いかな

若く……若うして死す

厳しく……厳しう諭しぬ

○又形容詞が佐變の動詞「す」の上に添はりて、副詞として用ひられたるときは、その語尾の「く」が、音便にて「う」若しくは「ん」となるものなり。(七三頁参照)

全くす……全うす

清くす……清うす

重くす……重んず

輕くす……輕んず

◎左の文章中の音便を指摘せよ。

- 一 遁ぐる敵を追うて、かへつて敵の重圍の中に陥りぬ。
- 二 雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氈を被て立つて徘徊す。
- 三 叔父を訪うて助力を請ひたれば、叔父も心よく承諾せられたり。
- 四 小成に安んずる人は、遂に何事をも完うすること能はざるものなり。
- 五 風烈しう、波荒々しうして、船覆らんとす。
- 六 月日は逝いて還らざれば、少年の時に於いて怠らず勉強すべし。
- 七 眼を蔽うて前途をおもんば、万感胸に迫つて落涙禁じ難し。

第二十二章 係 結

○通常、文章は動詞・形容詞及び、これに添はれる助動詞の終止形にて結ぶものなり。

濁水流る

顔色うるはし

吾は大阪に生まれたり

○然るに、上に「ぞ」「なむ」「や」「か」の助詞ある時は、連體形にて結ぶものなり。

水ぞ流るる

顔色なむうるはしき

鳥や鳴きぬる

世の中は何か常なる

○又上に「こそ」の助詞ある時は、已然形にて結ぶものなり。

水こそ流るれ

顔色こそうるはしけれ

吾は大阪にこそ生まれたれ

○右の如く、下の結びを變化せしむる力ある「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」を係りといひ、下の結びと對して之を係結カケムスビといふ。但し、口語には、この法存せずと知るべし。

○結びは往々省略せられて、そのまゝ文の結ばるゝことあり。かゝる場合には、適當なる結びの詞を補ひて見るべし。

口語にては「ぞ」「や」「か」等の係りある「こそ」なり。又「こそ」の係りはあれども、結びに影響せず。

人々感ぜぬはなかりきとぞ(いふ)

天壽を全うして終れりと(聞きぬる)

萬の人のよき龜鑑にこそ(あれ)

○係結の法は以上の如くなれども、若し、その文が「ば」「ど」とも「ども」「て」「で」「つつ」「が」「を」「に」等の接續の用をなす助詞によりて下に續けらるゝ時は、その結びを轉じて直に下文に連續せしむるものなり。

珍しき春もあすときこゆるぞきこゆるければ暮れなむ年を何か惜しまむ

來し方の事のみなむ思ひ續けらるる續けられていと物悲し
合戦の道をば武士にこそ任せらるべけれ任せらるべきに道にもあ

らぬ御計ひいかゝあらむ

◎左の文章につきて、係結の誤あらば正せ。

- 一 行きても見たき心地せらる。
- 二 それこそ盗人に追錢なり。
- 三 かの童どよく道を知れば、呼びて問はるべけれ。
- 四 今こそあちぶれたれども、彼も昔は一城の主なりし。
- 五 正成こそ實に忠臣の鑑といふべし。
- 六 心静まれる時にぞよき考へも浮ぶべけれ。
- 七 財多きこそ望ましかれど、不義の富は卑しむべき事なれ。
- 八 故郷に立ち歸るとも、今はまた、昔を語る友やなからめ。

經行復 續編增補卷之二 續編增補卷之二

續編增補卷之二

續編增補卷之二

續編增補卷之二

續編增補卷之二



広島大学図書

2000081513

